

ダイヤ高齢社会研究財団設立15周年記念イベント

超高齢社会を生きる 介護保険・介護予防の今とこれから

平成20年11月4日開催 シンポジウム(第1部 講演、第2部 ディスカッション)

当財団は、2008年6月に設立満15周年を迎えることができました。財団設立15周年の記念イベントとして、8月9日に介護従事者を対象としたシンポジウム・介護技術講習会を開催し、Dia News No.55の財団活動レポートで報告しましたが、11月4日には一般市民を対象に「超高齢社会を生きる—介護保険・介護予防の今とこれから—」と題するシンポジウムを、文京シビックホール2階小ホールで開催しました。

シンポジウム当日は、好天にも恵まれ、289名の方々の参加をいただき、設立15周年記念事業にふさわしい盛況なイベントとなりました。

(後援：厚生労働省・内閣府・高齢社会NGO連携協議会)

はじめに

当財団は、設立当初から介護問題を重点テーマに取り上げ、特に介護サービスの質の向上に関わる研究については先駆的かつ実践的な取り組みを行い、これまでに数多くの研究成果を社会に発信してきました。そこで、財団設立15周年記念イベントのテーマとして、当財団の研究活動の中核を成す介護を取り上げることとしました。

2008年7月に厚生労働省は「多くの方々に介護を身近にとらえていただき、様々な立場から介護問題を考え、関わっていただくこと」を設立趣旨として、11月11日を「介護の日」と定めましたが、この趣旨は

今回のシンポジウムの開催趣旨にも通ずるものです。

シンポジウムは、講演の部とディスカッションの部からなり、講師として厚生労働省国立保健医療科学院福祉マネジメント室室長の筒井孝子氏、東京都老人総合研究所研究部長の新開省二氏、明治学院大学心理学部教授の佐藤真一氏をお招きし、介護保険、介護予防、高齢者の心の問題について、それぞれ専門家の立場からお話をいただきました。ディスカッションのコーディネーターは聖学院大学人間福祉学部教授の古谷野亘氏に務めていただきました。

第1部 講演

第1部では、基本テーマ「超高齢社会を生きる—介護保険・介護予防の今とこれから—」に沿って、3名の講師に専門の立場からご講演をいただきました。

古谷野亘氏は、導入として「超高齢社会における二つの挑戦」と題し、超高齢社会が我々に突きつける挑戦には「介護が必要な高齢者の増加」と「元気な高齢者の増加」があると指摘されました。そして第1の挑戦への対応策である「介護保険(社会的な介護の仕組みづくり)」と「介護予防(元気な高齢者づくり)」、第2の挑戦への対応策である「元気の維持」と「意味のある暮らしの創造」についての問題提起がなされました。

筒井孝子氏からは、「介護保険の現状と課題」と題して、高齢化の進展に伴う介護ニーズの増大、要介護高齢者を支えてきた家族状況の変化の中で、高齢者の介



シンポジウム会場は熱心な聴衆で埋まった。

護を社会全体で支えあう仕組みとして創設された「介護保険」の概要、財源の状況、実施状況及び今後の課題について、分かりやすく説明していただきました。

介護保険は、第一に介護予防があり、次の段階で要介護者には介護サービスが提供されるものであること、利用者の増加に伴い介護保険料が高くなること、高い介護保険利用比率を持つ単身女性高齢者への対策に重点的に取り組むことの重要性に触れられました。そして、現在、安定的な財源確保のため、「要介護認定の適正化」「給付の適正化」「介護サービスの質の向上」「介護予防の推進」という視点に立って改革が行われている中、わが国のユニークな医療供給体制と合わせた抜本的改革が望まれるとの提言がなされました。



新開省二氏からは、「介護予防の今とこれから」と題して、介護予防が「介護が必要な状態（要介護状態）になることを予防する」という概念から生まれたことに触れ、介護予防に関する東京都老人総合研究所の研究成果や国内外の研究成果を踏まえて、「介護予防に向けた三つのポイント」として「栄養・体力・社会」が紹介され、「低栄養に要注意」「普段から足腰をしっかり鍛えておくこと」「家の外で活動に参加できる場を持つておくこと」の重要性が指摘されました。

介護予防への取り組みについては、一般高齢者や事業者の介護予防事業への関心の低いことを指摘し、地域をベースにした体系的な介護予防システムづくりについて提言がなされました。



佐藤眞一氏からは、「充実した高齢期の実現を目ざして」と題して、元気な高齢者にとって、第3年代に

当たる高齢期（引退前後～85歳頃）の充実のためには、お金や健康のほかに「生きがいの獲得」と「他者への貢献」が必要であるとの提言がありました。

そして、第4年代に当たる超高齢期（85歳前後以降）は他者からのサポートを受けながら生活するという前提に立つと、その充実のためには「自立よりも自律（自己決定）」を旨とした「大切な他者と共にある生活」が重要であることから、他者への「成熟した依存（上手な依存）」とポジティブな気分によるハッピーエイジングについて提言がなされました。

第2部 ディスカッション

コーディネーターの古谷野氏から各講師への2つの質問という形で進められました。以下、その概要を示します。

筒井講師：介護保険について

Q 日本の場合には、比較的要介護度の低い人も介護の対象になっていることが特徴的だと思うが、これは介護サービスについての哲学に違いがあるからではないか。日本では家族の役割はどうなっているのか。

A 日本の介護保険制度は世界に類を見ないほど利用者への給付が豊かである一方、介護における家族の役割に関して言えば、介護サービスを社会化することによって家族機能を外部化しようとした点の特徴である。これは、一つの実験であり、世界が注目している。

Q 優れた介護保険制度を維持する中で財政の問題が大きくなっているが、「高い保険料を払っているから利用しなければ損」だとか「介護保険制度を利用しな



第2部の質疑に応える講師陣。佐藤眞一氏(左)、新開省二氏(右)。



講師の筒井孝子氏(左)、コーディネーターの古谷野巨氏(右)。

いなら保険料を払う必要はない」という利用者に対しては、どのように応えたらよいのか。

A 介護保険は保険料も財源も市町村で決定することができる。利用者の皆さんが適正な利用をするという努力をすれば、自らの力で保険料を安くすることができ、それが結果として示されるわかりやすい仕組みとなっている。これは、医療保険と大きく違っているところで、介護保険財政を健全なものにするのは、実は、利用者であるということを最初に理解する必要がある。

新開講師：介護予防について

Q 介護予防の3つのポイント（栄養・体力・社会）の中に「心理」がないが、いいのか。「上手な依存」という対処の仕方は、介護予防との関係で言うと、プラスかマイナスか。

A 介護予防の3つのポイント以外にも精神面・心理面は大切に、前向きな気持ちを持てば、介護の場面では回復する確率が高くなり、介護予防の場面でも効果がある。また、介護の場面でも介護予防の場面でも、他者に上手に依存するのは、心理的に大切なことだと思う。

Q 講演で紹介された介護予防教室の成功例の殆どが農村部であり、都市部ではそのような地域ベースの活動には高齢者が集まらないのが実状だと思うが、都市高齢者の生活と意識に合わせた社会的な面での介護予防プログラムは可能か。

A 都市高齢者の活動には、農村部とは異なり、地域ベースの活動以外にサークル活動の様な目的を共有する活動という新たな活動が加わるが、行政などが支援すれば、都市型の介護予防プログラムも充分機能しうる。

佐藤講師：充実した高齢期の実現について

Q 加齢に伴う出来事への対処にはさまざまなものがあるということだが、超高齢期の高齢者にとって「良い補償」^(注)とは、どういうものか。

A 超高齢期の高齢者にとって心理的に「良い補償」とは、信頼のおける人間関係を大切な他者と保つことである。

Q 「上手な依存」は、自立にはマイナスにならないか。「優しくて朗らかで明るい人はリハビリに向かず、意地悪で頑固で嫌な人の方がリハビリに向いている」とも聞くが。

A 自立の獲得は必ずしも人生の最終目標ではなく、上手な他者への依存は、自立できているときにも自立ができなくなったときにも大切である。



今回のシンポジウムでは、4人の演者によるわかりやすい講演と示唆に富んだディスカッションでの応答によって、参加者の皆様には高齢者と介護の問題についてより深く理解していただけたのではないかと思います。

ダイヤ高齢社会研究財団としては、これからも介護問題に関する実践的で先進的な調査・研究に取り組み、その成果を広く社会に普及させていくことを目指します。

(三好和仁)

(注) 補償：ある事柄に対し上手に適応できない場合、他の事柄でその不適応を補おうとすること。

*なお、今回のシンポジウムの講演録を、『ダイヤ財団新書29』として発行(2009年3月を予定)いたしますので、シンポジウムの内容をより詳しくお知りになりたい方は当財団までお申し込みください。